
合わせ鏡 宇宙編

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

合わせ鏡 宇宙編

【ZPDF】

Z8739A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

結衣の家で合わせ鏡をすることにした奈々と結衣。合わせ鏡をした時、鏡に映つていたものは…

(前書き)

これはグループ小説企画です。ほかの先生方の作品は「合わせ鏡」と検索すると見れます。

また、過去のグループ小説の作品は「グループ小説」と検索すると見れますのでよろしくお願い致します。

「ねえ、奈々・・・。合わせ鏡って知ってる?」

「合わせ鏡?」

「うん。鏡同士を合わせたら鏡の中に鏡が映るでしょ?当然自分も・・・。それでね。13番目に映る鏡の顔は自分の死んだ時の顔なんだって」

「え〜!こわ〜い!」

少し演技染みた台詞で私は声を発した。

私達はいま、結衣の家で遊んでいる。ちょうど結衣の両親が買い物に行っているのでこの家には私と結衣の2人だけ・・・。結衣は部屋の片隅に置いてある結衣の母親の鏡台を見ながら合わせ鏡のことを言つている。

私も合わせ鏡のことは知っている。ただなぜかそれを言つのが怖かつたから知らないふりをした。でも結衣は続けた。

「ねえ、合わせ鏡やつてみない?」

信じられないことを言つと思つた。だって自分の死んだときの顔が映るつていうのにわざわざ試すなんて・・・。そんなに自分の死んだとき顔が見たいのかな・・・。

私は嫌だつた・・・。首を横に振り、結衣の誘いを断つた。

「嫌なの？・じゃあいいよ・私が一人でやるから」

「え？・ちよ・・・！やめなよ！怖いじゃん！」

私は本気で怖かった。結衣はなにを考えているんだろう。怖いもの知らずとはこのことを言つんだろうか？それとも怖いもの見たさ？

そんな私の心配をよそに結衣は鏡台を開けた。

それは開くと三面鏡でそれぞれが合わせ鏡の役割を果たす仕組みになっていた。結衣は鏡台に備えられていた椅子に座り、合わせ鏡が出来るように鏡を調整していた。

そして・・・。

「な～んだ。なんもないじゃん。普通の顔だよ？」

結衣は、期待はずれと言わんばかりにため息をつき椅子から離れた。そして母親に見つからぬように鏡台の鏡を元に戻した。

その後すぐに、結衣の母親が帰ってきて私達はしばらく遊んだ後に私は家に帰った。

でも、それからたった一年後・・・結衣は死んだ。

その顔はとても穏やかだったことを覚えている。

結衣が死んでもう二年もの月日が経つ。

結衣の死に顔は穏やかだったが、死因は不明。でもたぶん、私は分かっている・・・。合わせ鏡をしたから・・・。

合わせ鏡をした者はその日からちよひど一年後に死ぬ。そんな話をどこかで聞いたことがある。

だから私は一度と合わせ鏡はしないことを誓った。

16歳になつた私は高校一年だつた。部活はバスケ部に入つていて毎日の学校は充実していく楽しかつた。

「奈々……あぶない……」

その声に反応して、前を見た私はボールの直撃を喰らつた。ぼーとしていたのか……。友達のバスに気がつかず、日にボールを喰らつた。

その反動で私はしりもちもつこつてしまつた。

「奈々、大丈夫？」

友達の心配する声が耳に入つてくる。

「わ、ちょっと目が腫れてるよー水で冷やしてきなよー」

友達のその声に私の身体は自然に水道へと向かつていた。

水道の蛇口の上には鏡があるが、もちろん合わせ鏡なんかじゃない。

「イタタ、目大丈夫かな？」

私は目のまぶたを自分の指で開いて、目が良く見えるよつて鏡の前に顔を近づけた。

鏡には私の目が映つていた。

そして、鏡に映る目には、鏡に映る私の目が映つている。

私はこの時とんでもないことに気が付いた。

これは、合わせ鏡となる・・・。

それに気が付いた瞬間私は腰が抜けその場に倒れてしまった・・・。

一年後・・・私は死んだ。死因は不明らしい。

でも私は分かっている。合わせ鏡をしたからだ。

今・・・世の中の人間は気が付いていない。

鏡を見ることそれはそのまま合わせ鏡をしていくことになるのだ。

例え意識をしなくても、鏡に映る目を辿つていいくと1-3番目にはあなたの死に顔が映つている。

あなたも一年後に死ぬ。

でも、待つて・・・。それはおかしい。

なら、なぜみんな生きているんだろう。みんな鏡を見ているのに・・・。みんな合わせ鏡をしているのに・・・。

私は生まれた。親は奈々と名づけた。

それから12年の時が過ぎて、私は結衣の家に遊びにいった。
母親は買い物に行つていて結衣の家には2人だけ。それを待つてま
したと言わんばかりに結衣が言う。

「ねえ、合わせ鏡って知ってる？」

私は、知つている・・・。でも知らない振りをした。

「合わせ鏡？」

「うん。鏡同士を合わせたら鏡の中に鏡が映るでしょ？当然自分も・
・・。それでね。13番目に映る鏡の顔は自分の死んだ時の顔なん
だって」

どこかで聞いたことがある台詞・・・。いや、知つている。

私は知つている。全てを・・・。

これは、終わらない死。永遠と繰り返す死。なんどもなんども私達
は死んできた。全員・・・いつ死ぬか。それは変わらない。13歳
で死ぬ人は永遠に13歳で死に。30歳で死ぬ人は永遠に30歳で
死ぬ。

永遠に続く死。死ねば転生してまた死ぬ。

死。

合わせ鏡をした時に映る鏡が永遠に続いているように私達も永遠に死に続ける。

もはや、世界中の人間が合わせ鏡の呪いにとりつかれていた。

(後書き)

読んで頂きありがとうございます。すいません。最後、なんか説明文っぽくなつてしましました。

考えていたうちに田に映る合わせ鏡と合わせ鏡のよつに永遠に繰り返される死の両方を思い付いたので合体させてみましたが、なんか無理があつたような…。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8739a/>

合わせ鏡 宇宙編

2010年11月14日02時58分発行